

(交流セッション)Hello, World!  
世界の人々の健康を考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒形, 朋子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20780/00032784">https://doi.org/10.20780/00032784</a>

## Hello, World! 世界の人々の健康を考える

駒形 朋子

(国立国際医療研究センター 国際医療協力局)

---

私の海外での活動は、おもに研究を通じたものである。私はいろいろな場所でいろいろな人々の暮らしぶりを見聞きすることが好きで、この仕事を続けている。「命がけ」「世界を救う」、また「グローバル化の流れ」を受けて、といったことでなくとも、自分が知らなかった世界で新たな仲間と経験のない仕事をするのは、とても楽しい。その楽しさを知り、世界のあちこちに愛着のある場所があり、人々がいること、またその人々との生活を通して異なる価値観や世界観を知っていることが、お仕着せでないグローバル感覚だと思う。

私は、子どものころから外国を舞台にした物語、また世界史や地理が好きではあったが、身近に海外経験のある人もいなければ帰国子女でもなく、ごく一般的な環境で育った普通の人である。看護師を志したきっかけは、高校生のときに開発途上国で活動した方の話を聞いたことだったが、学生時代に特に何か勉強するとか活動に参加するわけでもなく、ごく普通に（多くの学生の皆さんと同様、実習や国試に四苦八苦して）地方の看護学校を卒業し、看護師になった。

臨床での毎日は、もちろん大変なこともあったが環境に恵まれとても楽しいものだった。文字通りよく学び、よく遊んだ時期だったと思う。臨床3年目頃、帰郷、結婚、進学など周囲で変化が起こり始め、私はどうしようかな、と思っていた時、通勤電車で見た青年海外協力隊の広告が、夢を思い出させてくれた。「そうだ、協力隊に行こう！」思い立ってすぐに応募し、パキスタンに派遣されたのは看護師になって5年目の夏だった。まったくの異文化での暮らしは未知と驚きにあふれ、パキスタンの人々との暮らしはかけがえのない異文化感覚を涵養してくれた。それが「人々の日常生活行動と健康や病気との関連」という現在の研究テーマに続いている。

またパキスタンでの経験は、向学心と探求心も与えてくれた。帰国後熱帯病の研修に参加し、そこで出会った先生方に勧められて大学院への進学を決めた。人々の暮らしへのまなざしを持ち続けながら、修士課程ではパキスタンで農村女性の日常生活行動、博士課程ではベトナムでマラリア感染の要因を研究した。博士号取得後は、博士研究員、看護系大学教員、職能団体職員、再度看護系大学教員、と2、3年ごとに「そのときやりたいこと」をやってきたが、キャリアの後半では、一番好きな国際保健を仕事の中心におきたいと考えている。

近年のグローバル化は健康分野にも及んでおり、生活習慣病や高齢化などもはや世界共通の課題である。それは、日本で臨床経験を積み看護師として自立して仕事ができれば、世界で活躍できる可能性があるということである。「国際」という言葉や概念が過去のものになり、日本人の看護職がより柔軟に国内と国外を、またライフとワークを行き来できるようになることを願う。